巻頭言

日本癌病態治療研究会理事長を拝命して

特定非営利活動法人 日本癌病態治療研究会 理事長
千葉大学 大学院医学研究院 先端応用外科学 教授
松原 久裕

この度、伝統のある日本癌病態治療研究会理事長を拝命いたしました。約30年前の1991年に初代磯野可一会長により発足し、二代目生越喬二会長が発展させ、三代目の竹之下誠一会長がその基盤を確固たるものにするため特定非営利活動（NPO）法人格を取得、理事長に就任されました。皆様のご承認を頂き、昨年の総会にて竹之下理事長より理事長を引き継ぎました。たいへん身の引き締まる思いであり、また光栄に存じております。精一杯尽力して参る所存です。

本研究会は癌の病態や治療法にかかわる研究に関し、癌自体の悪性度と宿主に惹起する生体反応の両者を考慮した治療法の確立を目指すことを目的としており、これは現在、手術、放射線、抗がん剤に続く第４の癌治療の柱と考えられるようになった免疫チェックポイント阻害剤を含め癌治療研究における本質そのものと考えられます。３年ほど前の2016年、本研究会発足からちょうど４半世紀に当たる第25回の研究会を千葉市にて主催させていただきました。固形癌における癌治療の中心は手術であることは論を待ちません。周術期に種々の抗がん剤、放射線を利用した集学的治療が展開され、予後向上に寄与しております。また、これらの治療の効果には生体側の反応は極めて重要であり、栄養状態、炎症などを含め生体の免疫機構は極めて重要な役割を担っております。これらのことを鑑み、癌と宿主の関係を明らかにして治療を目指す、まさに本研究会の目的そのものを「癌と宿主の連環を斬る」というテーマとしました。皆様の御協力により充実した稔りある研究会となりました。改めて御礼申し上げます。

竹之下前理事長が繰り返し述べていた本研究会の最大の財産である『Annals of Cancer Research and Therapy』が、坂本純一前編集委員長の基で編集委員にも多数の若手の先生が積極的にリクルートされ、Pub Med 収載へ向け着実に成長しています。昨年より柴田昌彦編集委員長に引き継がれ、さらなる発展が期待されます。また、小川健治名誉会員のご尽力により、引き続きこの『W'Waves』誌の表紙にヴェルサイユ在住の渡部画伯による心温まる素敵な洋画を使わせていただくことができました。心より感謝申し上げます。また、今年の第28回本研究会は埼玉医科大学総合医療センター消化管・一般外科教授の石田秀行先生に当番世話人をお願いしており、６月27、28日に川越市で開催されます。シンポジウムの「消化器発がんのゲノム・エピゲノム異常研究の最前線」を始め魅力ある主題が企画されており、たいへん楽しみな研究会になると確信しております。このように皆様のご支援により本研究会が発展して参り

夕日の写真は、今年の11th AACR-JCA Joint ConferenceがMauiで行われたときのものです。

ます。何卒よろしくお願い申し上げます。

臨床研究法の施行により、医学研究を推進しにくい環境が進んでいます。基礎研究から臨床研究への橋渡しの部分がこれまでも日本の医学研究の問題点の一つでありましたが、今回の法律施行によりさらなる障壁が高くそびえるようになったと実感しています。しかしながら、法律により真実が変わる訳でもありません。真実を追究し、本研究会の目的である癌治療研究の本質を一歩ずつ極めていくことが重要なことは変わりません。一方で認定医や専門医制度を持たない小規模の研究会、学会は昨今の企業による協賛が減少していく中、淘汰されていくという意見も見られます。しかしながら、癌治療研究の本質を目的としている本研究会はその真の目的を追求していけば、必然的に必要欠くべからざる研究会であります。本研究会を失うことは新たな発見、有益な討論などに必要不可欠な、その貴重な場を失うことに他ならないと考えております。竹之下理事長の基、研究会自体の基盤強化のためNPO法人に移行しましたが、研究会としてのシステムは維持しており、施設会員制度を採っております。そのため個人会員となる必要が無く、若手の先生の経済的負担を軽減し、より成長できる貴重な場を提供できると考えております。若手研究者とともに癌治療研究の本質について討論できる貴重な研究会としてさらに発展させていきたいと考えております。皆様のより一層のご支援をお願い申し上げ、ご挨拶に代えさえていただきます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。